

「旧約の信仰者たちの手本」 サムエルとダビデ (11:32~34)

32 これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオン、バラク、 サムソン、エフタ、
 また ダビデ、サムエル、 預言者たちについても話すならば、時間が足りないでしょう。

(ヘブル人への手紙 11:32)

■はじめに

1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。

2. 手紙の内容と11章

- (1) ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。著者は、手紙の前半で、神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。
- (2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。その中で、11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。時代を追って、
 - ① 族長時代以前：アベル、エノク、ノア
 - ② 族長たちの時代：アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ
 - ③ 出エジプトから荒野の旅：モーセの両親、モーセ、イスラエルの人々、ラハブ
 - ④ 士師記の時代前期から二人の士師、ギデオンとバラク（時期的にはバラクが先）
 - ⑤ 士師記の時代後期から二人の士師、サムソンとエフタ（時期的にはエフタが先）
 - ⑥ 士師記の時代の後、王ダビデと最後の士師であり預言者であるサムエル
 - ⑦ 「預言者たち」は原文では、「またダビデとサムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた預言者たちを指している。

- (3) 前回はサムエル、今回は「サムエルの晩年とダビデの登場」である。

■前回の内容 サムエル（誕生からサウル王を立てるまで）

1. サムエルは、預言者そして最後の士師である。彼の信仰の手本を一言でいえば、「信仰によって、正しいことを行った」（ヘブル11:33）である。
 - (1) Iサム12:1~5・・・サムエルがサウル王を立てたときにイスラエルの人々に語ったことば。サムエルが士師として、公正にそして自分の利益を求めずに、奉仕してきたことが確認された。
 - (2) Iサム12:23b~24・・・「よい正しい道」とは、人の目から見て正しいことではない。「ただ、主を恐れ、心を尽くし、誠意をもって主に仕えなさい」。これは、信仰によってのみ可能となる。「信仰によって、正しいことを行った」（ヘブ11:33）

2. サムエルの生涯（誕生からサウル王を立てるまで）

(1) サムエルの誕生と献身（Iサム1:1~2:11a）

① 1:1 父親は、エルカナ

- 「エフライム人ツフ→トフ→エリフ→エロハム→エルカナ」
- エフライム人とあるが、「エフライムの山地に住んでいる人」の意味。
- 住んでいた町「ラマタイム・ツォフィム」は、「ツフ人でラマタイム生まれの」とも訳せる。ラマタイムという町は、1:19では「ラマ」。

② 系図は、I歴6:33~38にある。レビ族である。

- レビ→ケハテ→イツハル→**コラ**・・・→エルカナ
- エルカナ→**サムエル**→ヨエル(8:2~3)→**ヘマン**(I歴25:4~5)
 - サムエルは自分の息子たち、ヨエルとアビヤを「さばきつかさ」としたが、二人とも、わいろを取って、さばきを曲げた。イスラエルの長老たちが王を立ててほしいと要望するためのきっかけになった。
 - サムエルの孫、ヘマンは、ダビデ王のもとで、礼拝賛美をする奉仕者となる。「王の先見者ヘマン」とも呼ばれた。「賛美をしながら預言をする者」は、ヘマンのほかにも、アサフ(I歴25:2)とエドトン(I歴25:3)。

③ コラ事件（民16章）

- 荒野の旅40年間の中で、民が組織的にモーセとアロンに逆らった大事件。
- コラはレビ族ではあったが、アロンの家系ではなかったので、祭司になれない。それを不満として、ルベン族のダタン、アビラム、オンと共謀し、さらに会合で選び出された名のある者たち250人のイスラエル人とともにモーセに立ち向かった。
- コラとダタンとアビラムは、彼らの住まいとしている天幕付近の地面が割れて、のみこまれた。ダタンとアビラムはその妻子、幼子たちも。
- アロンと反抗者250人はおのおの自分の火皿を取り、その上に香を盛り、主の前、すなわち幕屋の前に立った。すると、主のところから火が出て、250人は焼き尽くされた。アロンひとりが無事であった。
- 民26:11 「しかしコラの子たちは死ななかった」

(2) 祭司エリの息子たちの非行とサムエルの成長（2:11b~26）

① 1:3 エリの息子たち、ホフニとピネハスは主の祭司であった。

② 2:12~17 エリの息子たちは、「よこしまな者で、主を知らず」犠牲の肉についての規定を守らず、脂肪のついたままの生肉を要求し、民から取った。

- 犠牲の肉は、煮て食べる（出29:31）
- 脂肪は全部主のもの、祭壇の上で焼いて煙にする（レビ3:16）
- 普段の食事でも、脂肪と血は食べてはならない（レビ3:17、7:23~27）

③ エリの息子たちは、「会見の天幕の入り口で仕えている女たちと寝ていた」（2:22）。この女性たちは、献身してシロの幕屋で仕えていた女性たち。士師エフタの娘は「彼女はついに男を知らなかった」（士11:39）とあるので、この非行には関係していない。

- ④ エリは息子たちに注意はしたが、彼らは父の言うことを聞こうとしなかった。
エリもそれ以上の対処をしなかった (2:23~25)
- ⑤ 一方、少年サムエルはますます成長し、主にも人にも愛された (2:26)。
- (3) 「神の人」による祭司エリへの警告 (2:27~36)
- ① 34節 エリの息子たちは1日のうちに死ぬ (→4:11)
- ② 36節 エリの家系の祭司は職を失う (→I列2:26~27 祭司エブヤタルは
罷免されてアナトテに帰る →後年の預言者エレミヤはアナトテの出身者、
エブヤタルの子孫か? エレ1:1)
- (4) 少年サムエルに主のことばが語られる (3:1~18)
- (5) サムエルは成長して預言者として立つ、主がシロでサムエルに現れる (3:19~21)

BC1069 サムソン、士師として活動開始

- BC 1067 (6) のちに「エベン・エゼル」という地名になる場所での戦いとエリの死 (4:1~22)
- (7) ペリシテ人に奪われた神の箱 (5:1~7:1)
- ① 戦場 (エベン・エゼル) →アシュドテのダゴンの宮へ、ダゴンの偶像はバラバラになり、アシュドテの住民は腫物に悩む
- ② アシュドテ→ガテ→エクロン → 7か月間 ペリシテ人の野にあった
- ③ ペリシテ人の領主は5人 (②のほか、ガザとアシュケロン)、金のねずみと金の腫物、それぞれ5個を添えて、神の箱をイスラエル領内に戻す

20年

20年

18年

BC1049 サムソン、ガザのダゴンの宮を崩壊させて死す
5人の領主全員とともに数千人のペリシテ人が下敷きになった。

- BC 1047 (8) エベン・エゼルの戦い (7:2~14)
- (9) サムエルの士師としての働きと彼の息子たち (7:15~8:3)
- (10) サウルに油をそそぐ、ミツパでの王への指名 (8:4~10:27) BC 1043?
- ① 9:2 「美しい若い男」
- ② 10:7~8 サウルへの命令
- このしるしがあなたに起こったら、手当たりしだいに何でもしなさい。神があなたとともにおられるからである。
 - あなたは私より先にギルガルに下りなさい。私も全焼のいけにえと和解のいけにえとをささげるために、あなたのところへ下って行く。
 - あなたは私が着くまで七日間、そこで待たねばならない。私がなすべきことを教える。
- (11) アモン人の侵攻、ヤベシュ・ギルアデの危機 (11:1~11)
- (12) ギルガルで改めてサウルを王とする (11:12~12:25)
- ① 11:14 「王権を創設する」直訳【王国を再建する】

BC 1030

2年

BC 1028

■本日の内容 サムエルの晩年とダビデの登場

1. サムエルの晩年 (BC1028 - BC1020)
- (13) ペリシテ人との戦い、サウル王の失格 (13:1~14:46)

- ① 13:1 サウルは○歳で王となり、2年間イスラエルの王であった。
ASV (英語訳) サウルは【40】歳で王となった。2年間治めたときに・・・
- ② 13:8~9 サウルは、サムエルが定めた日によって、七日間待ったが、サムエルはギルガルに来なかった。・・・こうして彼は全焼のいけにえをささげた。
- ③ 13:13 あなたの神、主が命じた命令 (単数形) を守らなかった。
- ④ 13:15b~23 サウル王に従う兵力は 3,000 人→600 人
- ⑤ 14:1~23 ヨナタンの信仰「主がお救いになるのに妨げとなるものは何もない、人数の大小にかかわらず」(6節) →ペリシテ軍は恐怖に陥り同士討ち
- ⑥ 14:24~46 サウル王の愚かな命令「夕方まで、私が敵に復讐するまで、食物を食べるな」→兵は疲れ、夕方に分捕り物の羊・牛をほふり血のままで肉を食べる→サウルが夜間の追撃を続行しようとしたとき祭司が止めて主に伺いを立てる→追撃の中止
- (14) サウル王の努力 (14:47~52) とアマレク聖絶命令に対する違反 (15章)
- (15) ダビデへの油注ぎ (16:1~13)
- ① 10~12節 ベツレヘム人エッサイの8人の息子たち、ダビデは末子(17:12)
- ② サムエルは、兄弟たちの真ん中でダビデに油を注ぐ
- ③ 13節 その日以来、主の霊がダビデの上に激しく下った
- (16) サウルから主の霊が離れ、悪霊におびやかされる (16:14~23)
- ① 14節 主の霊はサウルを離れた。「わざわいをもたらす、神の霊」= 悪霊が、サウルをおびえさせた。
- ② 23節 ダビデはサウルの道具持ちに。悪霊がサウルに臨むたびに、ダビデが立琴をひくと、わざわいの霊はサウルから離れ、サウルは元気を回復した。
- (17) ペリシテ人ゴリアテと少年ダビデとの戦い (17章)
- ① 54節 ゴリアテを倒した後のダビデの行動：ダビデはゴリアテの首を取って、エルサレムに持ち帰った。武具は彼の天幕に置いた。
- ② 57節 ダビデは戦場に戻り、サウルの前に。手にはゴリアテの首を持って。
- ③ ゴリアテの剣はその後、ノブの祭司に預けられ、後日ダビデの手に (21:9)
- (18) ダビデの登用とサウルの恐れ、ダビデはサムエルのもとへ (18章・19章)
- ① 18:2 サウルはその日、ダビデを召しかかえ、父の家に帰らせなかった。
- ② 18:7~8 女たちの歌「サウルは千を打ち、ダビデは万を打った」、サウルは、このことばを聞いて、非常に怒り、不満に思って・・・
- ③ 18:9 その日以来、サウルはダビデを疑いの目で見えるようになった。
- ④ 18:10~11 その翌日、「わざわいをもたらす、神の霊」がサウルに激しく下り、彼は家の中で狂いわめいた。ダビデはいつものように、琴を手にして弾いたが、サウルは槍をダビデに二度投げつけ、ダビデは二度とも身をかわず。
- ⑤ 18:12~16 サウルはダビデを恐れ、自分のもとから離して千人隊の長とした。ダビデが大勝利を収めるのを見て、サウルはダビデを恐れた。
- ⑥ 18:17~30 そこで、サウルは、1回目は上の娘メラブ、2回目は下の娘ミカルを妻として与えることを条件に、ダビデをペリシテ人との戦場に向かわせ、戦死をねらう。結果として、ダビデは2回とも成功し、サウルは娘ミカルを妻

としてダビデに与えた。サウルは主がダビデとともにおられることを見、また知って、ますますダビデを恐れた。

- ⑦ 19:1~8 サウルは、ダビデを殺すことを息子ヨナタンや家来の全部に告げた。ヨナタンはダビデを隠し、父にとりなす。サウルは聞き入れて、誓った。「主は生きておられる。あれは殺されることはない」。ヨナタンはダビデをサウルのところに連れて行ったので、ダビデは以前のようにサウルに仕えることになった。そのあと、また戦いが起きて、ダビデはペリシテ人を撃退する。
- ⑦ 19:9~17 ダビデが戦功をあげるのを見たサウルに、また、「わざわいをもたらす主の霊」が臨む。ある夜、サウルは自分の家において、ダビデは琴を手にしてひいていた。サウルは槍でダビデを壁に突き刺そうとする。ダビデは自宅に逃げるが、サウルの使者(刺客)は自宅を見張り、朝になってからダビデを殺そうとした。妻ミカルは、窓からダビデを下ろして逃がす。
- ⑧ 19:18~24 ダビデは、ラマのサムエルのところに行き、サウルが自分にしたこと一切をサムエルに話した。そして **サムエルと、ナヨテに行って住んだ。**

(19)ダビデはサウルの子ヨナタンのもとへ、ヨナタンとの別れ (20章)

(20)ダビデの逃亡、ノブ (祭司の町) →ガテ (ペリシテ人の町)、狂人を装う (21章)

- ① 21:1~9 ノブの祭司アヒメレクから、ゴリアテの剣を受け取る
- ② アヒメレクは、祭司アヒトブの子 (22:11)
- 14:3 サウルの側近の祭司アヒヤ: エリ→ピネハス→アヒトブ→アヒヤ
 - よって、アヒメレクは、エリのひ孫。アヒヤとは兄弟

(21)アドラムのほら穴→モアブのミツパ (両親を預ける) →ユダの地・ハレテの森、サウルはノブの祭司たちを虐殺、祭司エブヤタルがダビデのもとへ (22章)

- ① 預言者ガドの進言によって、ユダの地に帰る
- ② エブヤタルは、ノブの祭司アヒメレクの子。サウルによる虐殺から逃れる。
- ③ エブヤタルは、エポデを携えて来た (23:6)。これにより、主への伺いができるようになる。→ 23:2 「ダビデは主に伺って・・・」

(22)ケイラ救援、しかしサウルの追手がかかり、ケイラを出て、荒野へ、さらにエン・ゲディの要害へ (23章)

(23)サウルがダビデを追ってエン・ゲディの荒野へ、サウルとダビデの約束 (24章)

BC 1020 (24)25:1 サムエルの死、ダビデ【20歳】はラマを弔問し、パランの荒野へ

サムエル死亡時の年齢は不明。70歳と仮定すると、生まれはBC1090、乳離れしてシロに来たのはBC1089。エフタの娘がシロに来たのは、BC1087、サムエルが3歳の頃となる。

3. ダビデの賛美礼拝とサムエルとの関係

(1) I歴 15:16~28 エルサレムに神の契約の箱を置く天幕を張り、賛美歌隊を編成

- ① ダビデの町に、神の箱のために場所を定め、そのための天幕を張った。
- ② 16節 レビ族の者たちを十弦の琴、たて琴、シンバルなどの楽器を使う歌うたいとして立て、喜びの声をあげて歌わせるよう命じた。

(2) I歴 16:4~38

- ① それから、レビ人の中のある者たちを、主の箱の前で仕えさせ、イスラエルの

- 神、主を覚えて感謝し、ほめたたえるようにした。かしらはアサフ、・・・。
- ② 祭司ベナヤとヤハジエルは、ラッパを携え、常に神の契約の箱の前にいた。
- ③ その日その時、ダビデは初めてアサフとその兄弟たちを用いて、主をほめたたえた。
- (3) I 歴 16:39~42 ギブオンに残るモーセの幕屋の前でも、賛美歌隊の奉仕
- ① 祭司ツアドクと彼の兄弟である祭司たちを、ギブオンの高き所にある主の住まいの前におらせ、全焼のいけにえを、朝ごと、夕ごとに・・・
- ② 彼らとともに、ヘマン、エドトン、その他、はっきりと名を示された者で、選ばれた者たちを置き、主をほめたたえさせた。
- ③ ヘマンとエドトンの手には、歌う者たちのためにラッパとシンバルとがあり、また神の歌に用いる楽器があった。
- (4) I 歴 23:1~5 ダビデの晩年には賛美歌隊は、4千人
- ① 4千人は、ダビデが賛美するために作った楽器を手にして、主を賛美する者となった。・・・このうち、指揮者3人と歌の達人288人については、次に。
- (5) I 歴 25:1~7 【 】は25:8~31に記載された24組との対応
- ① アサフの指揮下に4組、4人の息子がそれぞれの組のリーダー。【ザクル第3、ヨセフ第1、ネタクヤ第5、アサルエラ第7】の4組 ×12人 = 48人
- ② エドトンの指揮下に6組、6人の息子がそれぞれの組のリーダー。【ゲダルヤ第2、ツェリ第4、エシヤヤ第8、シムイ第10、ハシャブヤ第12、マティヤヤ第14】の6組 ×12人 = 72人
- ③ ヘマンの指揮下に14組、14人の息子がそれぞれの組のリーダー。【ブキヤ第6、マタヌヤ第9、ウジエル第11、シェブエル第13、エリモテ第15、ハナヌヤ第16、ハナニ第18、エリヤダ第20、ギダルティ第22、ロラムティ・エゼル第24、ヨシュベカシャ第17、マロティ第19、ホティル第21、マハジオテ第23】の14組 ×12人 = 168人
- ④ 合計 24組×12人=288人。各組のメンバー11人は、いずれもリーダーの「子たち、兄弟たち」。
- ⑤ アサフ、エドトン、ヘマン、彼ら及び主にささげる歌の訓練を受けた彼らの同族 — 彼らはみな達人であった — の人数は288人であった。総計291人。
- (6) I 歴 9:22 「ダビデと予見者サムエルが彼らの職責を定めた」のである
4. 神殿の仕様書 (I 歴 28:11~19)
- (1) 12節 御霊によりダビデが示されていたすべてのものの仕様書き
- (2) 19節 「私に与えられた主の手による書き物」
5. ソロモンの神殿礼拝 (II 歴 8:14)
- (1) ソロモンは、その父ダビデの定めに従い、祭司たちの組分けを定めてその勤めにつかせ、レビ人もその任務につかせ、毎日の日課として、祭司たちの前で賛美と奉仕をさせた。門衛たちも、その組分けに従って、おのおのの門に立たせた。神の人ダビデの命令がこうだったからである。
6. 詩篇 42ほか「コラの子たちのマスキール」